「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」の授業化の試み

――中学校道徳科での場合――

森　一郎

はじめに

現在の道徳科では，指導すべき内容を 4 つの視点に分けて示しており，さらにそれぞれの視点ごとに 22 の内容項目（道徳的価値，徳目）を下記のように定めている。

A 主として自分自身に関すること ［自主，自律，自由と責任］［節度，節制］［向上心，個性の伸長］［希望と勇気，克己と強い意志］［真理の探究，創造］ B 主として人との関わりに関すること ［思いやり，感謝］［礼儀］［友情，信頼］［相互理解，寛容］ C 主として集団や社会との関わりに関すること ［遵法精神，公徳心］［公正，公平，社会正義］［社会参画，公共の精神］［勤労］［家族愛，生活の充実］［よりよい学校生活，集団生活の充実］［郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度］［我が国の伝統と文化の尊重，国を愛する態度］［国際理解，国際貢献］ D 主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること ［生命の尊さ］［自然愛護］［感動，畏敬の念］［よりよく生きる喜び］

内容項目をみると，「思いやり，感謝」，「礼儀」など馴染みのある項目も多く含まれている。

しかしながら，上記「D」の中の「感動，畏敬（いけい）の念」については教師の間からも，どのように授業をしたらよいかわからないという声が出ていた。この「感動，畏敬の念」については学習指導用要領の解説書によると，「美しいものや気高いものに感動する心をもち，人間の力を超えたものに対す

る畏敬の念を深めること」[1]（下線部筆者，以下同様）と説明されており，この表現は道徳科以前の「道徳の時間」[2]においても使用されていたが，従来から授業化が最も難しいものとされていた。その理由としては「人間の力を超えたもの」という「抽象的で具体的でないもの」を扱うことが難しいことや,「畏敬の念」という普段使わない言葉をどのように理解したらよいか分からないことのためだ，といわれてきた[3]。

そこで本稿では，最初に「人間の力を超えたもの」とは具体的に何なのか,「畏敬の念」とは何に対する畏敬なのかを明らかにする。そして以上の内容を踏まえて，道徳科において「畏敬の念」の授業化を実施するうえでの要点を明らかにし，さらに学校現場での実践に資するため，具体的な授業案（指導案）を提示する。

なお本稿では,「人間の力を超えたもの」や「畏敬の念」などの表現は,第 2 節で検討するように,やや宗教的な意味も含まれると思われる点から,児童・生徒の理解力や認識力などの発達段階を考慮して，中学生を対象とする。

１.「人間の力を超えたもの」及び「畏敬の念」についての内容の検討

（１）「人間の力を超えたもの」とは

「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」については，従来の「道徳の時間」でも使われていた表現であるが，ここでは「3　主として自然や崇高なものとのかかわりに関（かん）すること」の内容項目のひとつとして扱われていた。その説明としては「自然を愛護し，美しいものに感動する豊かな心

---

[1] 文部科学省（2018 年）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』教育出版，66 頁。

[2] 日本の戦後の道徳教育は，昭和 33(1958)年の「道徳の時間」から始まった。しかしながら，その名称が示す通り，「道徳の時間」は教科ではなく，教科書も生徒に対する評価もなかった(ただし副読本は使用可)。しかしこうした状況に批判が集まり，平成 30(2018)年度より「特別の教科 道徳」(略称 道徳科)となり文部科学省検定の教科書も使用され児童，生徒に対する評価もされるようになった。

[3] 諸富祥彦編著（2007 年）『「人間の力を超えたものへの畏敬の念」の道徳教育』明治図書，8-9 頁。植草伸之（2010 年）「畏敬の念を教えられる教師になろう」『道徳教育』No.630，明治図書，9 頁，など。

をもち，人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」となっている。記載されている表現では最初に「自然を愛護し」となっているところから「人間の力を超えたもの」とは具体的には「自然」を想起させる流れとなっている。旧学習指導要領の解説書もこの内容項目の説明の部分に「自然」という言葉を 12 回も使用している[4]。したがって解説書を読む限りでは「人間の力を超えたもの」とは「自然」であると理解させる流れになっている。例えば文部科学省が編集し副読本として使用された『私たちの道徳』においても，「人間の力を超(こ)えるもの」の説明としては「自然は美しさをみせる一方で，台風や豪雪(ごうせつ)，地震(じしん)，火山の噴火(ふんか)といった人間の力では抗(あがら)うことのできない猛威(もうい)を振(ふる)うこともある」[5]と書かれており，ここでも「人間の力を超えたもの」とは，美しさと恐ろしさが同時に存在するところの「自然」であるとなっている。

しかしながら「人間の力を超えたもの」を「自然」と見なすという視点とは異なって，次のような見解もある。たとえば岡田は「『人間の力を超えたもの』と言われたら，『神仏』としか考えようがないのは私だけだろうか」[6]と宗教的な意味があるのではないかと述べている。また石堂は，「『人間の力を超えたもの』と表現される以上，宗教的次元の意識を待ち望むことになろう。つまり，キリスト教的な『神』や『創造主』，仏教的な世界観，あるいはニーチェ流にいえば『超越者』を想定したうえで，宗教的情操への誘いになるであろう」[7]と，その宗教性を明らかにしている。このように「人間の力を超えたもの」は明らかに宗教的な意味を含んでいると主張する研究内容がある。

さらに，新たに始まった道徳科での内容項目の構成を以前の「道徳の時間」のそれと比較すると，「人間の力を超えたもの」の位置づけが異なっている。すなわち「道徳の時間」での記述が，「自然を愛護し，美しいものに

---

4 文部科学省(2008 年)『中学校学習指導要領解説 道徳編』日本文教出版，52 頁。
5 文部科学省（2014 年)『私たちの道徳 中学校』廣済堂あかつき，116 頁。
6 岡田健治（2008 年)「『宗教に関する一般的な教養』と『宗教的情操』は『愛国心』と密接な関わりがある」『現代教育科学』625 号，明治図書，54 頁。
7 石堂常世(2009 年)「改正教育基本法と道徳教育の新展開について―“心の教育”という徳育の限界を問う―」『白鴎大学教育学部論集』，36 頁。

感動する豊かな心をもち，人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」となっており，「自然」や「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」が一文の中で表現されているのに対して，道徳科においては「自然愛護」と「感動，畏敬の念」とは別の内容項目であり，結論的には，畏敬の念の対象は，従来のように「自然」にだけ向かうのではなく，宗教的な意味も含めて対象を広く解釈する余地を残している。

（２）「畏敬の念」とは

「畏敬」という言葉については，道徳科の学習指導要領解説書で次のように定義されている。すなわち，「『畏敬』とは『畏れる』という意味での畏怖という面と，『敬う』という意味での尊敬，尊重という面が含まれている。畏れかしこまって近づけないということである」[8]と説明されている。つまり「畏れ」とは単に「恐ろしい」という意味ではなく，身分の高い人や優れたものに対して畏れ多く控えめな気持ちで接するという意味も含んでおり，いわば高貴な対象に向かう気持ちとして解釈することができる。この点に関して『畏敬』と題する著書がある O.F.ボルノーも「畏敬は人間における何か聖なるものに向けられているのだ，と恐らく一般的に言えるであろう」[9]と述べている。更に「畏敬」という言葉が道徳教育全体の目標になったのが，平成元（1989）年度の学習指導要領改訂の時であり，「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」と表現された。この表現に対して村田は「特に『畏敬』という宗教的ニュアンスを持った言葉が道徳教育の目標のなかに姿を現したことの意義は大きい」[10]と，畏敬と言う宗教的な意味を含む言葉が道徳教育の目標の中に入ったことを評価している。

この「畏敬」という言葉に，宗教的な意味が含まれているとする見解に関しては，多くの研究者が指摘しているところである。たとえば藤井・中村は「そもそも崇高や畏敬の念といった道徳項目は宗教の根幹をなすものといえる。自然や崇高なものとの関わり，畏敬の念は道徳教育においても

---

8 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』，66 頁。
9 O.F.ボルノー著，岡本英明訳（2011 年）『畏敬』玉川大学出版部，57 頁。
10 村田昇（1993 年）『「畏敬の念」の指導』明治図書，20 頁。

重要な要素だが，同度に宗教の根源的な経験でもある」[11]と，畏敬は道徳と宗教の両方に重要な概念であるといっている。

このように検討していくと,「人間の力を超えたもの」にしろ「畏敬の念」にしろ，いずれも宗教的な意味をも含んでいることがわかる。ただし，ここで注意すべき点は,「宗教的な意味を含む」といっても，特に，公立学校では日本国憲法や教育基本法の政教分離の原則から，直接的には神や仏といった表現は使えないということである。ではどのようにすれば，授業化は可能であろうか。

２．中学校の教科書にみる「畏敬の念」の内容

前節でみたように, 新しく始まった道徳科においては,「畏敬の念」は「自然保護」とは別の内容項目として位置づけされている。

では中学校の教科書において「畏敬の念」は，具体的には何を対象にしているであろうか。次ページの表 1 は道徳科になって初めて使用された 8 社計 24 冊の教科書の内容を一覧表にしている。

表の右側に畏敬の対象をまとめているが，24 冊の内 20 冊は広い意味で「自然」を対象にしている。他は「女性ランナー」や「病室の画家」など人物を対象にしているが，これは「畏敬の念」の内容項目では「感動，畏敬の念」として「感動」と「畏敬」がセットになっているため，感動の方に重点を置いた教材と思われる。

このようにみてみると,「畏敬の念」の対象は以前の状態と変わらず，ほとんどが「自然」であることを想定している。確かに「自然」は地震や台風などの災害を起こし，人間の力ではどうすることもできないという意味で「人間の力を超えたもの」ともいえる。しかし道徳科では「畏敬の念」は「自然保護」とは別の内容項目となっているところから,「自然」とは別の「人間の力を超えたもの」を想定する必要があるのではないだろうか。

では，それは「何」なのかを次の節で検討する。

---

[11] 藤井基貴，中村美智太郎（2014 年）「道徳教育における内容項目『畏敬の念』に関する基礎的研究」『教科開発学論集』第 2 号，静岡大学，174 頁。

表１　教科書別の「畏敬の念」の内容と対象

発行	年	教材名	内容	畏敬の対象
光村	1	命の木	屋久島にある縄文杉	縄文杉(自然)
	2	宇宙の始まりに思いを寄せて	130 億年前の「ヒミコ」の光	宇宙の光(自然)
	3	サグラダ・ファミリア	ガウディと彫師の外尾さん	建築家ガウディ
教出	1	オーロラの向こうに	オーロラを見た時の感動	オーロラ(自然)
	2	ハッチを開け知らない世界へ	宇宙飛行士の観た世界	地球(自然)
	3	もう一つの時間	別のもう一つの時間での出来事	動物(自然)
廣済	1	ガジュマルの木	遺跡を包み込む大木	大木(自然)
	2	人間であることの美しさ	倒れかけてゴールに入った女性	女性ランナー
	3	ほっちゃれ	鮭の滝登り	鮭(自然)
日科	1	ほっちゃれ	鮭の滝登り	鮭(自然)
	2	いのり	杉に込められた祈り	杉(自然)
	3	不思議な光景	宇宙飛行士が見た宇宙	宇宙(自然)
学図	1	最後の一葉	生きる希望を与えた葉の絵	病室の画家
	2	自分自身の絵を追い求めて	田中画家の奄美での生涯と絵	画家の田中氏
	3	瑠璃色の星	宇宙飛行士(山崎)が見た宇宙	宇宙(自然)
東書	1	神秘の世界へ	宇宙飛行士(野口)が見た宇宙	宇宙(自然)
	2	敬意をもって自然と接する	人間だけが自然の主役か	夜の自然(自然)
	3	神秘の世界へ	宇宙飛行士から見た宇宙と地球	宇宙(自然)
日文	1	オーロラ―光のカーテン―	オーロラを見た時の感動	オーロラ(自然)
	2	樹齢七千年の杉	屋久島にある縄文杉	縄文杉(自然)

	3	風景開眼	画家東山魁夷の観た風景	風 景（ 自然）
学研	1	自然の懐に抱かれて	北アルプスの燕岳に登って	風 景（ 自然）
	2	厳かなるもの	地球の変化について	地 球（ 自然）
	3	はるかなる生命の物語	南極での体験	南 極（ 自然）

３.「畏敬の念」に関する授業開発の内容と視点

現在使われている道徳科の教科書では畏敬の対象は大半が「自然」であった。確かに，地震や台風などの災害を起こす自然は，人間の力を超えているともいえる。しかしながら畏敬という表現には宗教的なものも含まれているという考え方に対しては，どのように考えればよいだろうか。

「人間の力を超えている」ということは，別の表現を使えば「人間の力ではどうすることもできない」,「人間の力では自由にならない」と言い換えることもできる。我々は自分の体は自分のものであって，自由に動かすことができ，何でも思い通りになると考えている。しかしながら怪我をしたり，病気になったりすると，自分の体であったりしても，自由にはならない。さらに自分の意思で生まれようと思って生まれたのでもなく，死ぬことさえも自分の意思では自由にならない。道徳教育でもしばしば用いられる表現であるが，人間は生きているのではなく「生かされている」ということである。道徳科の学習指導要領の解説書でも，この点について「人間は様々な意味で有限なものであり，自然の中で生かされていることを自覚することができる」[12]と書かれている。このように，人間が有限な存在でありまた人間が生かされている存在であるという視点は,「人間の力を超えたもの」という「人間を生かしている存在」と結びつけて考えることができる。

さらに「畏敬の念」については，次の点も検討する必要がある。それは従来から「畏敬の念」の授業を行うことが難しいといわれるのは,「人間の

[12]『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』，66 頁。

力を超えたもの」に対しての一方的な感情のみを扱っていたという点である。たとえば「自然に対する畏敬の念」の際によく使われる「自然の美しさや雄大さに感動する」,「自然の脅威に怯(おび)える」などは自然に対する一方向の感情であり，結局授業を行う場合も「自然って凄いですね」,「自然は恐ろしいですね」などと結論づけられてしまい，単調な流れになりやすく，発展性がなかったのである。こうした点を改善するには,「畏敬の念」の授業をどのように終わらせていくかという点である。これについて，解説書の関連する部分を見てみると「人間は様々な意味で有限なものであり，自然の中で生かされていることを自覚することができる。(中略) この人間は有限なものであるという自覚は，生命のかけがえのなさや尊さ，人間として生きることのすばらしさの自覚につながり，とかく独善的になりやすい人間の心を反省させ，生きとし生けるものに対する感謝と尊敬の心を生み出していくものである」[13]と述べている。すなわち「畏敬の念」の授業は「畏敬の念」で終わるのではなく，人間を生かしているところの「人間を超えたもの」に対する「感謝」の心という道徳的心情への形成につなげる必要があるということである。

以上のことを踏まえると,「畏敬の念」に関する授業開発に関しては，次の二つの点がポイントとなる。一つ目は「人間の力を超えたもの」を単に「自然」とみなすのではなく,「人間の力を超えたもの」によって人間が「生かされている」こと，つまり「人間の力を超えたもの」とは「人間を生かしているもの」であることを視点にすること。二つ目は「人間の力を超えたもの」に対して単に「畏敬の念」を表すのではなく，最終的には「感謝」の心を育むことを「ねらい」にすること，の以上の二点が重要となる。

４.「畏敬の念」に関する授業開発

（１）授業開発の事例

前節の授業開発の視点に基づいて開発した授業案は，以下の通りである。

①主題名　　人体の不思議

---

[13] 同上，66 頁。

②ねらい　生命や身体の神秘さ・不思議さを知り，それを通して，人間の力を超えた働きがあることに気づき，生きていることに対して畏敬と感謝の心を育む。

③ねらい設定の理由

本授業案は，人間の心臓の働きや，遺伝子の構造などについて科学的な理解に迫りながらも，科学では解明できない，生命や身体の神秘さ・不思議さを知り，それを通して，人間の力を超えたものの働きがあることに気づき，畏敬と感謝の心を育むことをねらいとしている。

④教材について

本授業の教材は，人体の不思議について書かれた二冊の書物からの要約と，医師であった井村氏の詩である。人体の不思議についての二冊の書物を用いたのは，資料を比較することによって内容に客観性と説得性をもたせるためである。

資料 1 は，『あなたがどこから来たのかわかる本―心臓外科医と探る生命の神秘』（今中和人著，いのちのことば社，2013 年）の要約である。著者は，年間約 100 例の手術に携わる現役の心臓外科医である。私たちは普段，心臓が動いていることや，肺を使って呼吸していることなど，ほとんど意識せずにあたりまえの事として暮らしている。しかし著者は，心臓を初めとする私たちの身体のしくみが，如何に精巧で完璧に造られているかを具体的な例で示しながら，こうしたことが，「偶然や単なる自然の進化ではなく，人間の力を超えたもののはたらきによるのではないか」と問いかけている。

資料 2 は，『生命の暗号』（村上和雄著，サンマーク出版，1997 年）の要約である。著者は筑波大学教授（当時）で，遺伝子の研究者である。身体の設計図といわれる遺伝子は，細胞の中の染色体にあり，四つの記号で 30 億もの膨大な情報が書かれている。資料 1 の著者と同様に，こうした情報は偶然に並んだとは考えられず，何か不思議な力が働いた結果ではないか，と述べている。著者はこの不思議な力の元を「サムシング・グレート」と名づけ，人間はこうした何者かによって生かされているという事実をしっかり見つめることが大切ではないか，と主張している。

両書の著者は，外科医と遺伝子の研究者という異なる職業ではあるが，いずれも科学的な思考の持ち主である。こうした科学的な思考の持ち主である両者が，人間の力を超えた存在を想定していることの意味は大きい。

資料 3 は，31 歳という若さで妊娠中の妻と 1 歳の娘を残してガンで亡くなった医師の井村和清氏が，闘病中に残した詩である。この詩は，私たちが普段当たり前と思っていることも実は当たり前でないことに気づかせる内容である。

資料 1「心臓外科医が探る生命の神秘」

私は心臓外科医で，年間約 100 例の手術に携わっています。こうした経験から，みなさんに考えてもらいたいことがあります。それは，私たちの心臓が，自分の意思とは関係なく，昼も夜も動き続けるのはあたりまえと思っていませんか，ということです。心臓だけでなく，胃や腸，肝臓や腎臓も，すべて自分の意思とは関係なく，しかも少しの間違いもなく，完璧に動き続けています。こうした私たちの身体の働きは「あって当然」でしょうか。私たちの身体は，単なる偶然や，自然の進化によって生じたのでしょうか。自分の意思とは関係なく働き続けている完璧な身体が，まったく偶然にできたとはどうしても考えられません。それでは，昔からの進化の結果でしょうか。私たちの心臓は，昔は昼だけ働いて，夜は休んでいたが，進化の結果，二十四時間働けるようになったのでしょうか。人間の臓器も昔は不完全なものであったが，進化の結果，完全なものになったのでしょうか。心臓も含めて，私たちの身体は，驚くべき完璧な働きをしています。酸素を肺から得ない胎児の心臓の血流の仕組み，そして出産直後に肺から酸素を得る血流の仕組みに一瞬で変わる驚くべき仕掛けなどを調べてみると，どれをとってもとても人には及びもつかないような知恵と知識と技術がその背景にあることがわかります。重要なことは，私たちの身体は，最初から完全なものでなければ，生きていくことさえもできない，ということです。つまり偶然にできたとか，段階的な進化は考えられないということです。

そのように考えていくと，私たちは，人間の力を超えた何か超自然的な

力によってつくられた，と考えられないでしょうか。
今中和人『あなたがどこから来たかわかる本―心臓外科医が探る生命の神秘』より

資料 2「生命の暗号」

遺伝子を研究していると，不思議な気持ちになることがあります。目に見えない小さな細胞，その中の核と言う部分に収められている遺伝子は，たった四つの化学の文字（通常，A，G，T，C のアルファベットで略称される）の組み合わせで表されています。この四つの文字で，人間の遺伝子の中には 30 億もの膨大な情報が書かれているのです。男性と女性の区別，髪の毛や皮膚の色の違いをはじめ，その人が何歳まで生きられるかも，遺伝子を調べれば分かるという人もいます。しかも人間だけでなく，地球上に存在するあらゆる生物―少なく見積もっても 200 万種―が同じ遺伝子によって組み立てられているのです。

これはまさに奇跡というしかなく，人間業をはるかに超えています。そうなると，どうしても人間を超えた存在を想定しないわけにはいきません。そのような存在を私は「偉大な何者か」という意味でサムシング・グレートと呼んでいます。サムシング・グレートとは「こういうものである」とはっきり断言できる存在ではありません。大自然の偉大な力ともいえますが，ある人は神様といい，別の人は仏様というかもしれません。どのように思われてもそれは自由です。ただ，私たちの大もとには何か不思議な力がはたらいていて私たちは生かされている，という気持ちを忘れてはいけないと思うのです。

私たちはよく「親に感謝せよ」といいます。親は自分を生んでくれたので，感謝しなければいけいない―これはわりに納得いく話です。しかし親にはその親がいて，その親にはまた親がいてと，さかのぼっていけばその先に親の元，つまり「生命の親」のような存在があっても不思議ではありません。

自分の親に感謝するということは，そのずっと遡った先にいる親にも感謝することにつながっていきます。それは目には見えないけれども，生命

の連続性からいって，存在することは確かです。そういう人間を超えた大きな存在によって，私たちは生かされているという事実を，まずはしっかり見つめることが大切ではないでしょうか。私は研究現場で遺伝子と付き合ううちに，そういうことが少しずつわかってきました。

村上和雄『生命の暗号』より

資料 3「あたりまえ」

あたりまえ
こんなすばらしいことを，みんなはなぜよろこばないのでしょう
あたりまえであることを
お父さんがいる
お母さんがいる
手が 2 本あって足が 2 本ある
行きたいところに自分で歩いてゆける
手をのばせばなんでもとれる
音がきこえ声がでる
こんなしあわせはあるでしょうか
しかし，だれもそれをよろこばない
あたりまえだ，と笑ってすます
食事がたべられる
夜になるとちゃんと眠れ，そして又朝がくる
空気をむねいっぱいすえる
笑える，泣ける，叫ぶこともできる
走りまわれる
みんながあたりまえのこと
こんなすばらしいことを，みんなは決してよろこばない
そのありがたさを知っているのは，それを失くした人たちだけ
なぜだろう
あたりまえ

井村和清（2005 年）『飛鳥へ，そしてまだ見ぬ子へ―若き医師が死の

直前まで綴った愛の手紙　新装版』，祥伝社，185-186 頁。

⑤授業案

段階	学習活動	主な発問と予想される生徒の考え	指導上の留意点
導入	心臓の働きに関心をもつ	Q1. 心臓は血液を全身に送り出しています。それでは，1分間にどれぐらいの量を送り出しているでしょうか。 ・5000cc（5 リットル）	実際に 500cc のペットボトル 10 本を前に並べて心臓の働きの凄さを実感させる。
展開	資料 1 の内容を理解する 心臓の働きの不思議さを知る	○資料 1 を教師が範読する。 Q2.人間の身体は自らの意思とは関係なく驚くべき働きをしているといわれています。あなたが考える身体の驚くべき働きとは何でしょうか。 ・心臓が昼も夜も休みなく動いている	自分の心臓に手を当てて考えてみることをヒントとする。 資料1から読み解くことを指示。
	資料 2 の内容を理解する	○資料 2 を教師が範読する。 Q3.村上さんはなぜサムシング・グレートという言葉を使ったのか。 ・精巧な遺伝情報が何の目的もなく，たまたま自然に出来上がったとは考えられない。これは人間業をはるかに超えている，と感じたから。	資料1との関連で考えさせる。 資料 1 を読み返し，自分の身体であっても，必ずしも自由にならない現実を理解させる
	生かされていることの意味を考える	Q4.「私たちは生かされている」というのは，具体的にどのようなことでしょうか。 ・まったく無の状態からは，簡単な生物さえ人間の力では造ることができない ・自分で自分の寿命を決めることはできない。	「考え・議論する道徳」として，この部分にできるだけ時間を確保する。
	私たちは何をしなければいけない	Q5.「生命の親」とも言われるサムシング・グレートに対して，感謝を表すには，	

	かを考える。 資料 3 の詩の理解	私たちはどのような態度で生きていけばよいでしょうか。まず自分で考え，次に隣の人と意見交換をしなさい ・生かされていることを感謝し，自分の体を大切に。 Q6.資料 3 の詩を各自で黙読し，感じたことをワークシートに書きなさい。	31 歳という若さでガンのため死亡した医師の井村さんについて紹介し，闘病中に残した詩を静かに黙読させる。
終末	教師の説話と，この時間に学んだことを書く。	○教師による説話(サムシング・グレートによって「生かされていること」について感謝の心を持つことの大切さ) ○本日学んだことをワークシートに書きなさい。	資料 1 から資料 3 までを再読するよう指示する。

（２）「畏敬の念」に関する授業の流れ

本授業は，私たちが普段当たり前と思っていることも，実は当たり前ではないことに気づかせる内容である。「目が見える，耳が聞こえる」，「心臓が動いている，食べ物を消化する」，こうしたことに対して私たちは意識もせず普通のことであると思っている。しかしながら，本授業はこうした当たり前のことが，実は当たり前でなく大変不思議なことであり，「人間の力を超えたもの」のはたらきによるものであることを考えさせ，それに感謝することを感じとらせる内容である。

導入では 1 分間に 5000cc もの血液を全身に送り出している心臓の働きによって人体の不思議さ，凄さを知ることになり，人体の働きについて興味・関心を喚起する。

展開部 Q2 では，自分の心臓は自分の意思とは関係なく昼も夜も動いていることを再確認し，改めて人体の不思議さ，凄さを認識する。さらに Q3 により人間の細胞の中の遺伝子が「偉大な何者か」(サムシング・グレート)によって書き込まれたことが分かってくる。Q4 によって，人間は生きているというよりは，生かされている存在であることに気づく。こうした事

例によって生徒たちは，自分たちの身体の不思議さと同時に，自分の身体が偉大な何者かによって生かされていることが分かり，畏敬の念に結びつく。Q5 では人間を生かしているサムシング・グレートに思いを寄せ，私たちは，どのようにすればそれに対して感謝の気持ちを表すことができるかを問うている。

展開部の最後に，若くしてガンで亡くなった医師の井村氏の詩を静かに黙読する。この詩によって資料 1 と資料 2 を日常の生活の視点より我々が「生きていること」があたりまえでないことを再認識することになる。そして改めて私たちが「人間の力を超えたもの」によって「生かされている」ことに気づき，日々当たり前に生活ができることの尊さや感謝を感じることができる。

本授業で用いた 3 編の資料は二人の医師と，遺伝子の研究者，つまり広い意味での科学者の文章であることも，内容に説得性をもたせるために確認しておく必要がある。

なお本授業を公立学校で実施するときに留意すべきことは，次の点である。すなわち，「人間の力を超えた何か超自然的な力」（資料 1），「偉大な何か（サムシング・グレート）」（資料 2）などの表現が資料の中で用いられているが，それらが「実体」として現実に存在するものとして生徒に強制的に認めさせてはならないという点である。しかし，そうした存在があると仮定したほうが，身体の仕組みや遺伝子の構造がうまく説明できることも，また押さえておく必要がある。

おわりに

本稿では道徳科において授業化が難しいとされてきた「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」を取り上げ，「畏敬の念」をどのように具体的に授業化すればよいかを考察してきた。その結果，従来のように畏敬の対象を「自然」に限定することなく，「人間の力を超えたもの」とは「人間を生かしているもの」ととらえ，日々我々が生かされていることの有難さや感謝の念を育むことをねらいとした授業案を提示した。

今後の課題としては，開発した授業によって「畏敬の念」が生徒にどの

程度育ったかを明らかにすることである。すなわち生徒に対する評価の尺度が必要となる。この評価の尺度がなければ，授業の有効性を判断することはできない。本稿の開発事例では，評価に関しては触れていない。今後は，評価の尺度をどのようにするかが，課題となる。

［参考文献］

道徳教育学フロンティア研究会編（2021 年）『道徳教育はいかにあるべきか　歴史・理論・実践』ミネルヴァ書房。

今中和人（2013 年）『あなたがどこから来たのかわかる本―心臓外科医と探る生命の神秘』いのちのことば社。

井村和清（2005 年）『飛鳥へ，そしてまだ見ぬ子へ―若き医師が死の直前まで綴った愛の手紙　新装版』祥伝社。

貝塚茂樹（2012 年）『道徳教科書の取扱説明書―教科化の必要性を考える』学術出版会。

河田孝文（2018 年）『君たちは〝いのち〟とどう向き合うか　●究極の道徳教材＆授業づくり』学芸みらい社。

文部科学省（2018 年）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』教育出版。

文部科学省（2008 年）『中学校学習指導要領解説 道徳編』日本文教出版。

文部科学省（2014 年）『私たちの道徳 中学校』廣済堂あかつき。

諸富祥彦編著（2007 年）『「人間の力を超えたものへの畏敬の念」の道徳教育』明治図書。

村上和雄（1997 年）『生命の暗号』サンマーク出版。

村田昇（1993 年）『「畏敬の念」の指導』明治図書。

O.F.ボルノー著，岡本英明訳（2011 年）『畏敬』玉川大学出版部。

渡部昇一／梶田叡一／岡田幹彦／八木秀次（2014 年）『日本再生と道徳教育』モラロジー研究所。

※本稿は，令和 4(2022)年 9 月に行われた精神文化学会第 12 回学術大会（於:キャンパスプラザ京都）で発表した内容に加筆修正を施したものである。